年間第３２主日

もう一組のおとめたち

マタイ福音書 25：1-13

（そのとき、イエスは弟子たちにこのたとえを語られた。）「天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた。ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。しかし主人は、『はっきり言っておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」

説教

わたしはプリンターはあまり使いません。たまに使うときにインクが切れていることがあり、予備のインクがないとあわててしまいます。何度かそういうことを経験したので、わたしは予備のインクと予備のプリンターを準備しています。これならインク切れでもなんとかなります。

きょうの福音は予備の油についてのたとえ話です。予備の油をもっている娘と用意していない娘がでていきます。持っているほうが「賢いおとめたち」

で持っていないと「愚かなおとめたち」です。そして愚かなおとめたちは油を買いに行っているあいだに花婿が到着してしまい門を閉められて中に入れてもらえない、つまり天国にはいれないというたとえ話です。
本田神父訳の『小さくされた人々のための福音』では賢い・愚かがそれぞれ「感性あるおとめたち」と「感性のにぶいおとめたち」と訳されています。感性といわれてもわかりそうで分からないことばとなってしまいましたが、天国に行けるか、行けないかの尺度として賢さとか、感性とか、が大切でありそれが肝心かなめなのだと、たとえの中で語られます。
このたとえは花婿、婚宴とあるように結婚式が舞台になっています。当時のユダヤでは夜中に結婚式をあげていて夜遅くなっても花婿の出迎えは村のおとめたちの仕事だったようです。夜中にお店なんてあいているのか、花婿がいつ来るのかわからないなんてちょっと変じゃない？とおもうのは日本の現在に暮らすわたしたちの感想で、昔のユダヤでは当たり前の習慣だったようです。また聖書では結婚は神の国の完成の比喩として用いられます。だからこのたとえは、天国に行けるか、いけないかの基準は予備の油の有り無しで決まるのだと単純に解釈してもはずれではないでしょう。
パソコンからプリント（天国行きのクーポン券？）したいのに、インク切れでプリントできない。仮に予備のインクを用意しているか、していないかで天国に行けるか、行けないかが決まるのであればだれでも予備インクを備えると思います。ところで、わたしが予備のプリンタも準備しているのは、インク切れのプリンタに新しいインクを補充してもプリントできないことを何度か経験したからです。そこでインクの予備だけでは不十分だ、プリンタごと予備を用意しておけば大丈夫という考えにいたりました。
油切れの５人のおとめたちは油をもっているおとめたちから油をわけてもらえずに、夜中に店に買いに行きますが、花婿の到着にまにあいませんでした。これじゃ「賢いおとめと愚かなおとめ」じゃなくて「意地悪な５人の娘と可

哀そうな５人の娘」じゃないの？という見方もできないことはありません。かりにわたしみたいに予備のインクだけじゃなくて予備のプリンタまで用意しているおとめがいたとします。つまり予備の油にプラスして、予備のともし火を用意しているおとめです。そこまで準備万端にやっているおとめが何人かいたとしたら、可哀そうな５人のうち何人かは救われたかもしれません。
マタイ福音書を読み継いできた2017年も今月で終わりとなり12月からはルカ福音書を読んでいくことになります。マタイの25章を今週、翌週、翌々週の３回に分けて聞いていきます。25章のテーマは神の裁きとは、その尺度・基準とはどのようなものかです。神の裁きをイエスがたとえを用いながら教えてくれます。きょうの福音では予備の油の備えの「あり、なし」が基準になっています。そこで問題です。
＜問題＞
イエスのたとえには登場しないのですが、もう一組の５人組のおとめ（賢い５人＋愚かな５人＋もう５人で合計15人）がいたとします。彼女たちも油の備えがありません。もちろん賢い５人組からは油を分けてもらえません。でも、ほかも５人とは違って夜の店にはいきませんでした。そして、彼女たちは火のついていないともし火をもって賢い娘組と同じように花婿を出迎えたとしたら、婚宴の席に招かれたでしょうか、それとも閉めだされたでしょうか。
もし招かれたとしたらこの５人組はただ賢いだけじゃなくて「ズル賢いおとめたち」です。招かれなければ「ずるいおとめ」となるのでしょうか。福音には伝えられていないので、ある意味では自由に想像できるとおもいます。みなさんはこのもう一組のおとめたちをどう思いますか？わたしもこの問題に取り組んでみます。